

「ロンドンの公園－自然との共生－」

ロンドンで暮して1年以上になるが、緑に溢れ、リスや鳥などの動物を観察できる公園が家の近くにあることが、どれだけ日々の生活を豊かにしてくれているかということを常々感じている。

ロンドンという大都会において公園は、友人、夫婦、恋人、また一人であっても自分たちの居場所を作れる場所だ。ロンドンで暮す人にとって、公園は第2の家のようにくつろげる場所であり、芝生は絨毯のようなものなのではないかと感じている。また、自然(芝生や木のみならず公園に生息しているリスや鳥など)を身近に感じたいという気持ちを持っていることや、日没が21時と遅い夏においては、仕事終わりに公園に向かう人が多く、自然の中で過ごすことが日常になっているということを強く感じた。

さらにロックダウン時には、息抜きをするために公園で余暇を過ごす人が特に多かったのだが、筆者もその一人であり、公園に遊びに来ている人の姿やリスや鳥などを見ると穏やかな気持ちになれた。たとえ一人で公園に来ていても、他の家族や木々や動物に囲まれることで、コロナ禍のように孤独になりやすい状況でも、寂しさを忘れることができる。ロックダウンを切り抜けられたのは、公園のおかげだと思っている。公園がなければ、行先もなく、週末もずっと家にこもっていたであろう。

以下は、グリーンパークやセントジェームズパークなどの様子である。



4月上旬の暖くなったある日の夕方、公園を横切ると、お花見ではないかと思うほど人々が集まっていた。ここは夏になると、ビーチの如く水着で日光浴をする人であふれる場所でもある。また、夏は、日没が遅く夜9時過ぎまで明るいため、夕方でもリュックを枕に

して芝生に寝転がっている人や、輪になってグループで談笑している人など仕事が終わってから公園に行く人を多く見かけた。



夕方セントジェームズパークで休んでいたモモイロペリカン



セントジェームズパークの白鳥



人懐っこいセントジェームズパークのリス。
リスの写真を撮る人を多く見かける。



セントジェームズパークの花壇前。定期的に花が植え替えられている。



グリーンパークにて等身大の象の群れが展示されていた。野生生物の保護を行っているチャリティ団体の Elephant Family と Real Elephant Collective が連携して実施した屋外展示である。この展示には環境破壊により生息地を奪われている動物といかに共存していくかというメッセージが込められており、他の公園でも展示されていた。





丸太を椅子にして会話を楽しむ人々。木の幹にもたれかかり、読書をしている人も時々見かける。



休日に写生を楽しむ人々。夏は、左端に写っているようにデッキチェアも貸し出されていた。



公園に大きなチェスボードが設置されていた。



公園の中に設置されている卓球台。公園に限らず公共スペースに置かれているのを見かける。

さて、ロンドンでは、2050年までに人口が現在の約900万人から1100万人以上へと増加すると予測されている。人口が増加しても、全ての市民が自然を楽しむことができるよう、ロンドンは政策的に公園を含むグリーンインフラの保全と拡大に取り組んでおり、2050年までにロンドンの面積の半分以上を緑化することを目標としている。

グリーンインフラとは、自然環境が有する機能を社会における様々な課題解決に活用しようとする考え方である。¹具体的には、公園、緑地、庭園、森林、河川、湿地、街路樹や屋上緑化などのグリーンスペースと河川、運河、池を含むブルースペースのネットワークを以下のような目的のために設計・管理することである。²

- 運動やリラクゼーションのためのスペースを提供し、健康を促す
- 気温の上昇や水害などの気候変動による影響を抑える
- 大気と水質の向上
- ウォーキングやサイクリングの促進
- 生物の生息地をつくり生物多様性を促す

以降、グリーンインフラを保全及び拡大する計画を打ち出しているロンドン環境戦略(London Environment Strategy)について一部取り上げ、すべての市民が自然を楽しむことができるようにするための課題や取組状況について紹介したい。

グリーンインフラに係る政策の一つが、ロンドンを世界初のナショナル・パーク・シティ(国立公園都市)にすることである。

ナショナル・パーク・シティとは、英国にある団体 National Park City Foundation が国際憲章を作成し、世界に発信している、都市をより環境に優しく、健康で、自然豊かなものにしていくという理念であり、イングランドやウェールズが地方政府として国立公園について掲げる下記のような目標を都市においても適用しようとするものである。³

- 一般の人々が国立公園の特質を理解し、楽しむ機会を促進する。
- 自然の美しさ、野生生物、文化的遺産を保護し、向上させる。
- 国立公園内の地域コミュニティの経済、ウェルビーイングを促進する。

また、ナショナル・パーク・シティは、市民が街の緑化を通じて生活の質の向上に携わる

¹ [プレゼンテーションタイトル \(mlit.go.jp\)](https://mlit.go.jp)

² [Green Infrastructure | London City Hall](#)

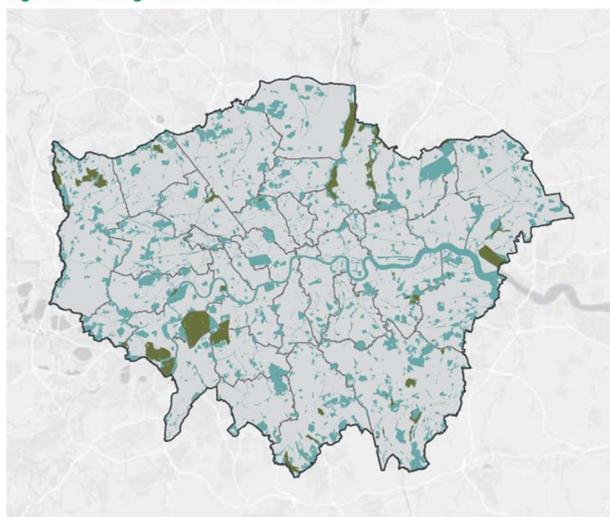
³ [FAQ - Frequently Asked Questions - London National Park City](#)

ことを押し上げるムーブメントでもある。そのため、コミュニティでの植樹プロジェクトやグリーンスペースをつくる活動を促進するファンドが創設され、2017年以降250のプロジェクトが実施されている。⁴

そして、2019年にロンドンは、公共空間、水路、自然環境が評価され、念願のナショナル・パーク・シティ（国立公園都市）の地位を獲得している。⁵

さて、ロンドンは、14,000以上の植物、動物等が確認されている自然が豊かな都市だ。野生生物にとって最も貴重な場所は、市長とロンドン区議会により「自然保護上重要な場所（SINC）」に認定され、保護されている。SINCは、ロンドンの面積の20%に及ぶ約1500か所以上が認定されており、ロンドンの生態系ネットワークの中核を形成している。⁶

Figure 8.2 - Designated nature conservation sites



Sites of Importance for Nature Conservation and Sites of Special

- Sites of Importance for Nature Conservation (SINC)
- Sites of Special Scientific Interest (SSSI)

Source: Greenspace Information for Greater London (GiGL)

Contains OS data © Crown copyright and database right (2018)

【ロンドンにおける自然保護上重要な場所を青色が示している⁷】

⁴ [Greener City Fund | London City Hall](#)

⁵ [Mayor hosts summit as London becoming world's first National Park City | London City Hall](#)

⁶ <https://www.london.gov.uk/what-we-do/environment/parks-green-spaces-and-biodiversity/biodiversity>

⁷ [the_london_plan_2021.pdf](#) p.328

森林の整備や保護が行われる一方で、ロンドンにおいて、新たに公園や森林を創ることは容易ではない。住宅、企業、学校や病院などの建設により、利用可能な土地が減っているためである。そこで、新規開発における緑化（ビルの屋上や壁の緑化、また、街路樹やビル間の小さな公園であるポケットパークの設置など）を促すために、ロンドン市内の各自治体に対し、Urban Greening Factor(都市緑化係数)を策定すべきとしている。⁸ Urban Greening Factor(都市緑化係数)とは、新規開発に伴い必要となる緑化の度合いである。

さらに、グリーンインフラの保全と拡大にあたり、グリーンインフラを確認できるデジタルマップを政策決定において活用するとともに、ナチュラルキャピタル(自然資本)の経済的価値を認識したグリーンインフラへの新しい投資の方法を模索している。

ナチュラルキャピタルとは、人間が自然(生態系、大気、海、大地、鉱物など)から直接的または間接的に得られる恩恵のことであり、材木や食料のように商品として取引されるものだけでなく、きれいな空気や水、健康などの幅広い価値を持つものも含まれる。

ロンドンでは、800万本に及ぶ木々のおかげで、大気汚染の軽減、二酸化炭素の大気中への排出の抑制、浸水害の抑制において1億3300万ポンド相当の効果を得られている。⁹

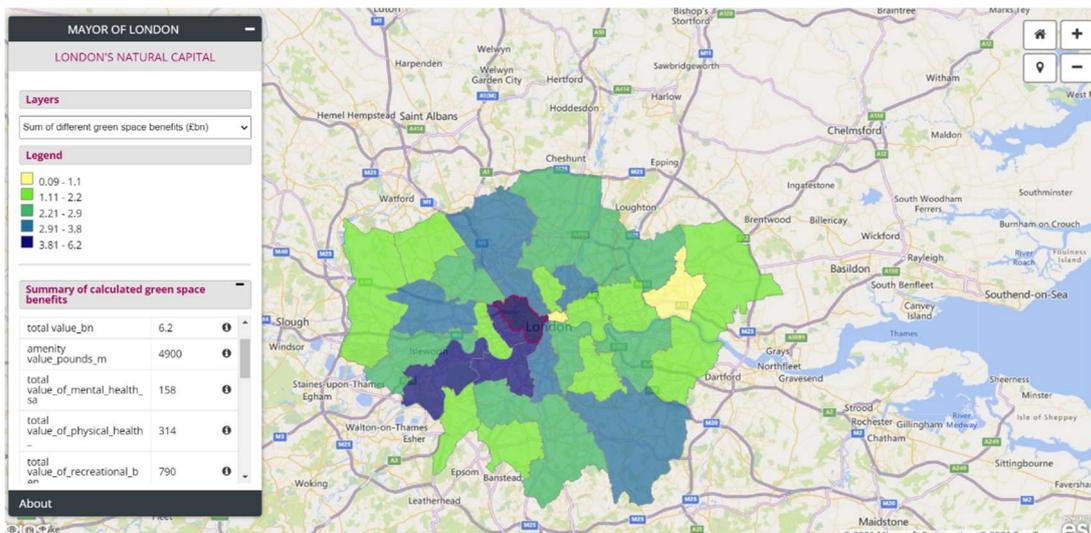
また、グリーンインフラの恩恵によりロンドン市民は、運動不足を回避できる。運動不足により罹患するリスクが高まるとされる病気には、心血管疾患、糖尿病、肥満、大腸がん、乳がんがあり、グリーンインフラのおかげで、これらの疾患により発生するコストとされる年間5億8200万ポンド(市民一人当たり年間67ポンド)が抑えられると推定される。¹⁰また、精神疾患については、抑えられる費用は、年間3億7000万ポンド(市民一人当たり年間42ポンド)と推計されている。¹¹

⁸ [the_london_plan_2021.pdf](#) p322-324

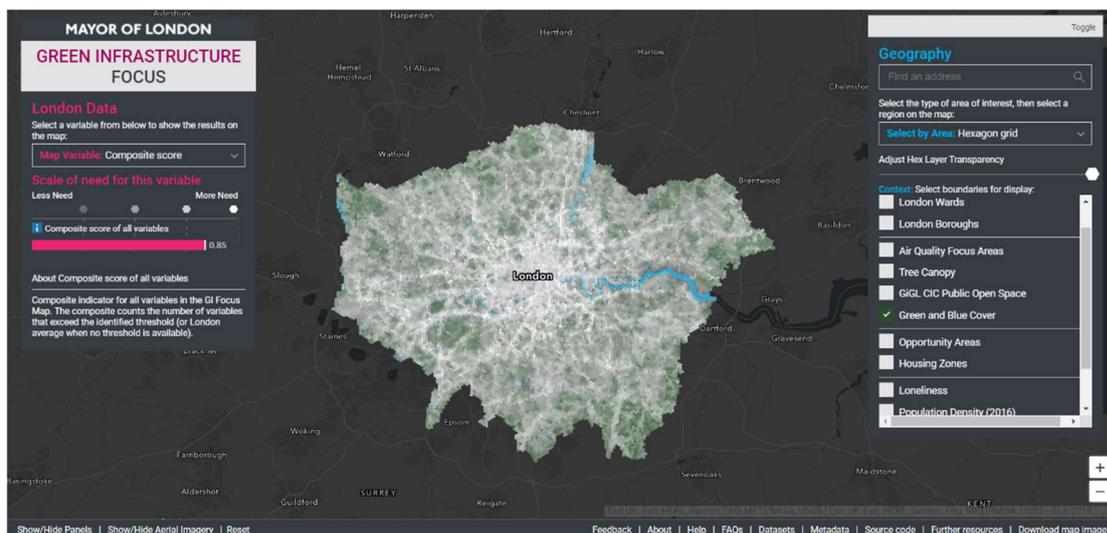
⁹ [the_london_plan_2021.pdf](#) p330

¹⁰ [11015viv_natural_capital_account_for_london_v7_full_vis.pdf](#) p.14

¹¹ [11015viv_natural_capital_account_for_london_v7_full_vis.pdf](#) p.15



【ナチュラル・キャピタル¹²を示すマップで経済的価値に応じて色分けされている。(単位は10億ポンド)
 マップ中心の赤い線で囲まれた区域は、セントジェームズパーク、グリーンパーク、ハイドパークがあり、ナチュラル・キャピタルが高いエリアになる。】



【グリーンインフラを確認できるデジタルマップ¹³】

上記のマップは、ロンドン環境政策 London Environment Strategy (2018~2023)¹⁴をモ

¹² [GLA Maps \(london.gov.uk\)](https://www.london.gov.uk/infrastructure/maps)

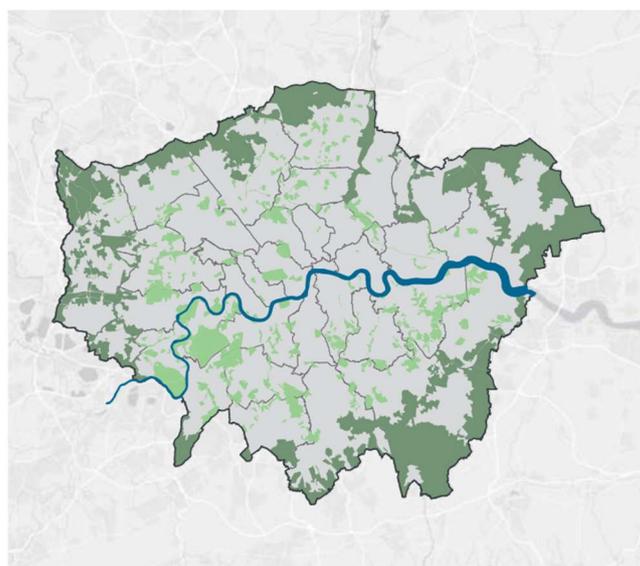
¹³ [Green Infrastructure Focus | Mayor of London](https://www.london.gov.uk/infrastructure/maps/green-infrastructure-focus)

¹⁴ [implementation_plan.pdf \(london.gov.uk\)](https://www.london.gov.uk/infrastructure/maps/green-infrastructure-focus/implementation-plan.pdf)

ニタリングし、政策決定する中でどの地域において最もグリーンインフラが必要であるか、また、その場所に最適なグリーンインフラのタイプと規模を検討するために必要な空間情報を提供するものである。また、誰でもウェブサイトで利用することができる。白地の箇所がグリーンインフラが乏しいことを示しており、ロンドンの緑被率は、48%から51%の間となっている。¹⁵

すでにロンドンには市の面積の21パーセントを覆う840万本の木があるが、2050年までにさらに10パーセント拡大することを目標としている。¹⁶

Figure 8.1 - Green Belt and Metropolitan Open Land



Green Belt and Metropolitan Open Land

- Green Belt
- Metropolitan Open Land

Source: Borough Local Plans

Contains OS data © Crown copyright and database right (2018)

【不適切な開発から保護されているグリーンベルト(緑色)及びメトロポリタン・オープン・ランド(黄緑色)¹⁷】

【所感】

ロンドンでは家賃が高いため、十分な広さの家に住むことができない人やシェアハウスをしている人が多いという。そのような中で、例えばプラタナスの木が生い茂り、芝生が広がる公園で過ごすことは、心身のリフレッシュに欠かせないことだろう。

¹⁵ [Green infrastructure maps and tools | London City Hall](#)

¹⁶ [Trees and woodlands | London City Hall](#)

¹⁷ [the_london_plan_2021.pdf](#) p.331

また、ロックダウンの際は、人々が公園に殺到したが、一方ですべての市民が公園などの緑が多い場所の近くに住んでいるわけではない。そのため、すべての市民が自然を楽しむことができるようにするという課題は、より必要性を増していると考ええる。

心身のリフレッシュを図る場所をつくることは都会に限らず重要だ。家ばかりにいと、心身のリフレッシュが図れなかったり、近所の人との接点が少なくなったりと交流が限定的になるからである。しかし、公園のように自然が多い場所が徒歩圏内であれば、これといった目的がなくても過ごせる居場所がもう一つでき、自然の中で会話を楽しんだり、交流を拡げたり、走ったり、読書をしたりと自分の時間を持ち、心身のリフレッシュを図ることができる。

ロンドンの人々は、芝生に直接寝転がり、木に持たれながら本を読む。また、丸太を椅子代わりにして、おしゃべりを楽しむ。そして、鳥やリスに優しい視線を送る。これらの様子を目の当たりにして感じていることは、日常においては忘れがちだが、人間は、植物や動物と共生しているということである。そのため自然と共生しているということを思い出させてくれる場所が身近にあることは、大切だ。

自然環境が有する機能を社会における様々な課題解決に活用しようとするグリーンインフラや人間が自然から得られる恩恵を測るナチュラル・キャピタルという考え方からは、人間の生活がいかに関に自然に支えられているかということを改めて知ることができる。

つまり、自然と共生していることを思い出させてくれる場所を身近につくるということは、ロンドンという大都会のみならず、環境問題に取り組み、心身の健康の維持を図るものとして必要なことではないだろうか。